

「『函館発信映画』を作る」という講演を聴いて

9月17日・18日（木・金）に函館国際ホテルで、第55回北海道私学教育テーマ別研修会が開催されました。

1日目の全体講演は、「『函館発信映画』を作る」と題して、シネマアイリス代表の菅原和博氏が行いました。菅原氏がどのような歩みのなかで映画に関わるようになったか？当時函館にあった大手の映画館が次々閉鎖されるなか、函館市民と共に作った映画館シネマアイリスを赤字からどう脱却させたか？映画に詳しいだけに、映画作りだけはやめておこうと思っていた菅原氏が、埋もれていた函館出身の佐藤泰志という小説家の本と出会うことから、函館市民と共に映画を作り始めた経過を訥々と話して下さいました。

初作品の『海炭市叙景』は募金活動で1500万円集め、残りの1500万円は持ち出し。谷村美月、加瀬亮、南果歩、小林薫など有名な役者も破格のギャラで協力してくれ、あとは地元の市民をオーディションで起用し、市民手作り弁当でなんとか制作できました。お正月映画として日本国内で5万人の動員があり、文庫化された本は8万部売れたそうです。

2作目は『そのみにて光輝く』でした。1作目の成功で資金繰りも楽にできるかと思いきや現実は厳しく、映画化まで2年間かかったそうです。しかし綾野剛、池脇千鶴、菅田将暉、高橋和也、火野正平らを自分達でキャスティングし、結果として観客10万人を動員する映画となりました。第87回アカデミー賞外国語映画賞部門に日本代表作品として出品されたほか、第38回モントリオール世界映画祭最優秀監督賞、キネマ旬報ベスト・テン1位のほか個人賞3部門を獲得しました。

3作目、来年夏封切り予定の『オーバーフェンス』は、オダギリジョー、蒼井優、松田翔太らが出演しますが、映像の収録はすでに終わり、音響に入っているそうです。菅原氏によると今までの作品とは異なり、函館の短い新緑の季節を舞台に、人が人を愛すること、ともに生きていきたいと願う姿を切り取った大人のラブストーリーになっているそうです。



菅原氏は遺愛のPTA会長を3年間務めて下さったのですが、いつも飄々としていました。悲壮感を漂わせて頑張るという感じは全くないのですが、しかし不思議といつの間にか人を巻きこんで、凄いことを成し遂げています。『海炭市叙景』のメイキングビデオ『完成までの歩み』のなかで、菅原氏は、制作開始の挨拶の際に「心をかよわせ、気持ちを一つにして…」と語っていましたが、菅原氏の体全体から、語る言葉から、自然とそのような雰囲気が出ているように感じました。

2015年9月20日